

【編集後記】

「生への執着は、生への力強き肯定にまでは高められませんが、しかもなお肯定はそのまま刑場に通ずる“今”の道でありました。私の時間は泣いているのに私の時計は笑っている。自らの手で建設し、みずからの血で守り、みずからの手で破壊する民族よ。名よ」(『きけわだつみのこえ』)。これは、みずからの生の断絶に絶望し、かつ祖国を愛し、みずからの死をかけて軍国主義に蹂躪された祖国の破壊を願った、自由主義者の兵士の言葉である。経済を前面に出して軍事国家への野望をひた隠す選挙独裁の安倍政権。祖父を父を叔父を兄を戦争で殺されてなお、戦争の道を支える多くの国民。私たちは、兵士の血の叫びを本当に聞いただろうか。ノーである。昨今の政治状況にそのような愚かさを見て、憤りを禁じえない。戦争の道を阻むには、人間の尊厳を蹂躪するあらゆる場面・問題を闘いきるしかない。部落解放の闘いもそれである。いや、その先頭に立ってほしい。

『部落解放研究』21号をお届けする。戦争、外国人、識字、被差別部落。熱い主張と貴重な情報の数々である。書く行為は代弁であり、代弁も立派な闘いである。そこには、無数の人々の血と涙が滲んでいる。本誌は、そのような代弁の集成でありたい。そのように信じつつ、代弁の確かさを読者に問いかけたい。そのような思いで本誌をお届けする。

最後に、お忙しいなか原稿を投稿していただいた方々に謝意を表する。

〈A〉